

未来の動物の謝肉祭 ハーモニーホールふくい 開館 20 周年記念公演

川島 洋一^{*1}, 黒田 和彦^{*1}, 松原 かおり^{*1}

"The Future Carnival of the Animals" 20th Anniversary Commemorating Performance of Harmony Hall Fukui

Yoichi KAWASHIMA^{*1}, Kazuhiko KURODA^{*1} and Kaori MATSUBARA^{*1}

^{*1} Faculty of Environmental and Information Sciences, Department of Design

"The Future Carnival of the Animals" is the name of the 20th Anniversary Commemorating Performance of the "Harmony Hall Fukui", held on September 23, 2017. Based on "The Carnival of the Animals", a masterpiece of French composer Saint-Saëns, "The Future Carnival of the Animals" added new composed 16 tunes, and video animation had been projected synchronously to the music. The video was shot and produced by the students of Department of Design, Fukui University of Technology. Its production process and the outline of the performance are reviewed in this paper.

Key Words : Composite Art, Video Animation, Movie, Performance Art, Charles Camille Saint- Saëns

1. はじめに

福井県立音楽堂「ハーモニーホールふくい」の開館 20 周年記念公演「未来の動物の謝肉祭」が、2017 年 9 月 23 日(土・祝)に開催され、音楽・映像・青少年の参加による新しい形式の¹⁾パフォーマンス芸術が試みられた。映像のディレクションと制作指導を行った立場から制作の経緯を報告し、「研究紀要」誌上で作品発表を行う。

2. 制作の目的と概要

ハーモニーホールの開館 20 周年記念公演「未来の動物の謝肉祭」においては、同館の橋本恭一プロデューサーがこれまで実験的に手がけてきた総合芸術の集大成として、音楽・映像・青少年の参加によるパフォーマンス芸術が試みられた。以下、作品の概要を解説する。

本作品では、フランスの作曲家サン＝サーンス (Charles Camille Saint-Saëns, 1835-1921) の代表作である「動物の謝肉祭」をもとに、原曲に登場する各動物²⁾と対をなす相棒として新たに 13 種類の動物を追加し、それぞれをモチーフに新曲が用意された。さらに、組曲としての構成上の理由により、セミフィナーレ、間奏曲、グランドフィナーレの 3 曲が追加された。これら計 16 曲の新曲を、福井県ゆかりの 4 人の作曲家が一人 4 曲ずつ書き下ろし、サン＝サーンスの原曲と合わせて全 30 曲からなるオリジナル組曲「未来の動物の謝肉祭」が構成された。これらの新曲に対して、公募で参加が決まった福井県内の中学校と高校、計 16 校の生徒たちにそれぞれ担当曲を決め、生徒たちの自由なイメージにより美術作品を制作してもらった。それらの美術作品をモチーフに、福井工業大学環境情報学部デザイン学科の学生が映像を制作した。

* 原稿受付 2018 年 2 月 28 日

^{*1} 情報環境学部 デザイン学科

E-mail : kwsml@fukui-ut.ac.jp

映像制作に当たっては、同大学非常勤講師の黒田和彦と松原かおり、同大学教授の川島洋一が映像のディレクションと制作指導および工程管理・資金調達・物品発注などの制作マネジメントを担当した。中高生たちが構想した動物をめぐる情景とイメージは、福井在住の作家・宮下奈都氏により全体を紡ぐストーリーとして脚本化され、俳優の朗読により曲間に披露された。音楽は、指揮者と計 10 人のアーティストにより同館の大ホールで演奏され、映像は演奏に合わせてステージ後方のスクリーンに投影された。

以下に、「未来の動物の謝肉祭」全体の構成と映像作品のキャプチャーを表にして示す。(Table 1)

Table 1 「未来の動物の謝肉祭」全体構成と映像作品のキャプチャー

作曲家 山下 真実			
第 1 曲 (サン=サーンス) 序奏と堂々たる ライオンの行進		第 3 曲 (サン=サーンス) 雌鳥と雄鶏	
第 2 曲 (新曲) キリン		第 4 曲 (新曲) ハリネズミ	
第 5 曲 (サン=サーンス) らば		第 7 曲 (サン=サーンス) 亀	
第 6 曲 (新曲) クジャク		第 8 曲 (新曲) 人魚	
作曲家 旭井 翔一			
第 9 曲 (サン=サーンス) 象		第 11 曲 (サン=サーン ス) カンガルー	
第 10 曲 (新曲) ハムスター		第 12 曲 (新曲) コウモリ	
第 13 曲 (サン=サーンス) 水族館		第 15 曲 (新曲) セミフィナーレ	
第 14 曲 (新曲) ペリカン			
作曲家 星谷 丈生			
第 16 曲 (新曲) 間奏曲		第 17 曲 (サン=サーン ス) 耳の長い登場人物	
		第 18 曲 (新曲) うさぎヒト	

作曲家 星谷 丈生（続き）			
第19曲（サン＝サーンス） 森の奥のかっこう		第 21 曲（サン＝サーンス） 大きな鳥籠	
第20曲（新曲） オオヨシキリ		第22曲（新曲） 7色の鳥	
作曲家 笠松 泰洋			
第23曲（サン＝サーンス） ピアニスト		第25曲 （サン＝サーンス） 化石	
第24曲（新曲） ネズミ		第26曲（新曲） オオサンショウウオ	
第27曲（サン＝サーンス） 白鳥		第29曲 （サン＝サーンス） 終曲	
第28曲（新曲） 子猫		第30曲（新曲） グランドフィナーレ	

3. 制作の経緯

最初にハーモニーホールより、福井工業大学に本公演への協力要請があったのは、2016 年 11 月であった。同ホールでは 2017 年 2 月に、福井県内の中学校・高校に対し美術作品の参加校を募集し、16 校が参加を表明した。同ホールは各学校へ担当曲を割り当て、中高生たちは春休み期間より美術作品の制作に着手し、5 月末までに制作が完了した。一方、福井工業大学では、デザイン学科の 3 年生科目「環境情報学演習 I」（4 月～8 月）において、本プロジェクトに参加する学生を集め、4 人の作曲家ごとに担当学生を 2～3 人のチームに編成した。各チームが、中高生とのコミュニケーションから映像制作までを一貫して担当した。その後、中高生の作品の完成を待って、福井工業大学にて 5 月と 6 月に計 2 回の合同ワークショップを開催した。ワークショップでは、中高生が美術作品を制作したイメージや意図、動物が出現する情景、その背景にあるストーリーなどを、映像を制作する大学生が中高生からヒアリングした。中高生が制作した美術作品は大学にて保管し、作品の撮影や絵コンテ制作を行いながら、必要に応じて中高生とのコミュニケーションを通して映像化のイメージを固めた。（Fig.1）



Fig.1 合同ワークショップ

7 月に作曲家による新曲が完成すると、曲を聴き込むと同時に、具体的に映像表現の演習や撮影方法の指導を行った。8 月に入ると、デザイン学科の夏期集中講義科目「映像デザイン」を使って、本格的に撮影を開始した。「映像デザイン」終了後も作業を継続し、9 月には映像の編集や追加撮影を何度も行った。9 月 19 日には、音楽リハーサルの生演奏に合わせて、小ホールで映像の試写を行った。そこで顕在化した問題を解決するため、編集作業の手直しは本番前日まで続いた。(Fig.2)

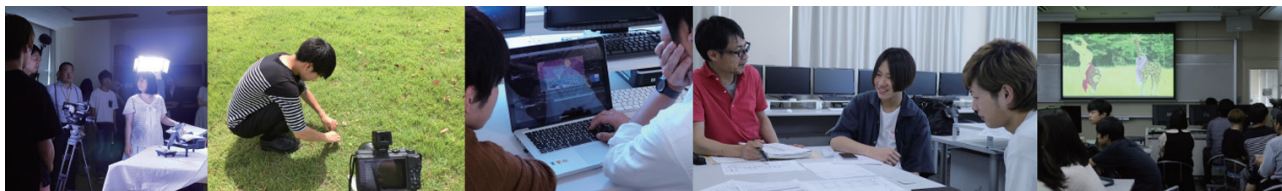


Fig.2 撮影と編集の様子

上で説明した映像制作の経緯を、以下に整理して示す。(Table 2)

Table 2 映像制作の主な工程

日程	内容
2016 年 11 月	ハーモニーホールより福井工業大学に映像の協力要請
2017 年 2 月中旬	同ホールが県内中学校・高校に対し美術作品の参加校を募集
2017 年 5 月 28 日	第 1 回 合同ワークショップ実施 (福井工業大学)
2017 年 6 月 3 日	第 2 回 合同ワークショップ実施 (福井工業大学)
2017 年 7 月	「未来の動物の謝肉祭」楽曲完成
2017 年 8 月～9 月	夏期集中講義「映像デザイン」にて撮影および編集 (学内および野外ロケ)
2017 年 9 月 19 日	音楽リハーサルの生演奏に合わせて映像を試写 (小ホール)
2017 年 9 月 21 日・22 日	プレゲネプロ、ゲネプロ ³⁾ (大ホール)
2017 年 9 月 23 日	「未来の動物の謝肉祭」本番 (大ホール)

4. 映像作品の構成と表現

中高生が美術作品を制作するに当たっては制約が設けられなかったもので、さまざまな完成形態をとった。おおむね立体の造形物と平面の絵画 (イラスト含む) に二分されたが、なかには具体的な映像化を想定してセル画として描かれた作品や、黒板にチョークで即興的に描かれたイラストもあった。また、4 人の作曲家による新曲は、クラシック調に限らず、ジャズや即興性の強い現代音楽に至るまでバリエーションに富んだ。したがって、映像化にあたっては、中高生や作曲家による作品の持ち味を生かすことが課題となった。

本稿において、すべての映像作品の内容を紹介することはできないが、ここでは「七色の鳥」を事例に、モチーフになった中学生の作品と彼女らの制作意図、設定されたプロットと宮下奈都氏による脚本、最終的な映像作品に至った工程と制作意図を表 (Table 3) にして示す。なお、映像は便宜的にキャプチャー写真で紹介する。

Table 3 「未来の動物の謝肉祭」 中高生による美術作品と大学生による映像化のプロセス事例

サン=サーンス：「大きな鳥籠」 対をなす新曲のタイトル：「七色の鳥」 作曲：星谷丈生	
制作工程：ワークショップでは福井中学校の美術部員が制作した作品の意図を、担当の福井工業大学デザイン学科の学生がヒアリングした。作曲家の星谷丈生氏は、美術作品からイメージする世界観を意識して作曲を行った。大学では完成した楽曲を聴き込み、美術作品をモチーフにした映像のイメージを担当チームで話し合っ、作品コンセプトを作成した。素材となる美術作品や風景を撮影し、楽曲に合わせて編集して映像作品として完成させた。	
美術作品 担当： 福井工業大学附属 福井中学校	<p>「大きな鳥籠」美術作品</p>  <p>生徒のコメント：見るだけではなく、いろんなところを回したり、遊んだりできるようにつくった。360 度いろいろなアングルから見てほしい。お客さんが鳥籠の中に入って、一緒に鳥の目線になって、籠の中の世界を見てほしい。</p>
脚本 担当：宮下奈都 「大きな鳥籠 七色の鳥」	<p>七色の鳥たちは、森の動物たちの人気者です。みんな仲がよく、おしゃれで、森の見守り隊として活躍中です。大きな鳥籠のステージで美しい歌を歌うと、森は明るくなり、植物が芽吹き、新しい命が生まれるのです。おや、この大きな鳥籠、どこかで見たことがあるような…。ある日、森の見守りの最中に赤い鳥がはぐれてしまいます。残った鳥たちは悲しみに歌が歌えず、森も暗く沈んで行きます。赤い鳥を探し続ける六色の鳥たち。すると、ピアニストに助けられて、赤い鳥が帰ってきました！よろこびあう鳥たちは、その夜、ピアニストと共に復活コンサートを開くのでした。森の動物たちも集まって、明るく平和な森が戻ってきました。</p>
映像 担当： 福井工業大学 デザイン学科	<p>撮影風景</p>  <p>「七色の鳥」映像コンセプト</p> <p>鳥かごと七色の鳥を表現する中学生の立体造形物は実にカラフルであったが、あえてモノクロ映像からスタートして、見る人に色を想像してもらった。鳥かごに閉じ込められた鳥たちの心情を、連続性のある描写を重ねることで表現した。羽ばたく鳥たちの動きを象徴するように、風車のプロペラが回る映像を重ねている。赤い鳥が見つかったからは、鳥たちが色を取り戻すプロセスを表現するため徐々に着彩する技法を取った。最後に鳥籠から飛び立ち自由になった鳥の解放感を、ドローンを使って一気に地上から上空へ飛び立つ鳥の目線で表現した。</p> <p>映像の画面キャプチャー</p> 

5. 顕在化した問題とそれへの対応

9 月 19 日の音楽リハーサルにおいて、生演奏に合わせて映像を試写したところ、曲のテンポが事前の録音と大きく異なり、曲調の転換点に合わせた映像のシーン転換や曲のエンディングのタイミングがまったく合わない深刻な問題が確認された。リハーサルの現場では、作曲家の指示により曲のテンポが演奏ごとに変化する事態が発生していたことから、映像の時間尺に自由度がなければ音楽に合わせられないことを認識した。そこで、2 台の Mac に映像を用意し、映像シーン転換のキメのタイミングごとに 2 台を切り替えながら投影する方法を採用することにした。(Fig.3)

本番 2 日前のプレゲネプロ、本番前日のゲネプロにおいて試行錯誤とタイミングの練習を重ね、本番では完璧に上映できた。また、即興性が特徴的な曲「オオヨシキリ」では、曲の持ち味を際立たせるために指揮の映像を本番前日に撮影し、事前に制作した映像に重ね合わせて即興性を演出した。



Fig.3 本番当日の会場風景（左）とオペレーションルームの緊迫した様子（右 2 点）

6. おわりに

このパフォーマンス芸術作品に取り組んだ学生にとっては、完成形がイメージできない未知の作品形式であることに加え、4 月から 9 月下旬の本番まで長期間にわたり共同で作業を経験したこと、作曲家や演奏家、ホールのスタッフなど一流のプロとの協働、一方で年少者である中高生の期待に応える役割など、プロとアマの間に立ち学ぶことが多かった。立場の異なる数多くの関係者とのコミュニケーションにも苦労した。大ホールにおける生公演という失敗が許されない状況に対するプレッシャーもあり、想像以上の困難に直面することとなった。本番での成功と結果的に高い評価を受けたことにより、映像制作のスキルを学んだ以上の貴重な経験ができたことは最大の成果であったと考える。これを機会に映像制作に興味を募らせ、積極的に作品制作に臨む学生も増えた。

音楽ホールとして世界的に高い評価を受けているハーモニーホールが、たとえば有名オーケストラの招待公演のようなありきたりの記念公演ではなく、新しい形式に果敢に挑戦したことから画期的な作品を生み出したといえる。中高生から大学生まで地元の青少年の参加⁴⁾を前提とした企画のコンセプトは、公共ホールとしてのあり方にも一石を投じた⁵⁾。音楽と映像による作品は、今回のような同時上映の形式だけでなく、より一体化した表現を生む可能性があることにも気づかされた⁶⁾。めったにチャンスがないことだが、今後の課題としていきたい。

注

- 1) ロックやポピュラー音楽のコンサートでは、音楽に合わせた映像投影がすでに一般的であるが、伝統や正統性を重んじるクラシック音楽では、それはめったに行われない。福井県立音楽堂の橋本恭一プロデューサーは、クラシック音楽に対して異分野の芸術表現を融合させる試みをこれまで何度か行ってきた。
- 2) サン＝サーンスによる原曲には、「水族館」「耳の長い登場人物」「大きな鳥籠」「ピアニスト」「化石」など動物そのものの以外のタイトルが含まれる。
- 3) ゲネプロ（独語 **Generalprobe** に由来）とは、本番と同じ条件で演目を通して実演し、舞台装置、照明などスタッフの動きも含めた進行全体の仕上がりを最終チェックする通し稽古のことである。プレゲネプロは、

ゲネプロ前の同様の通し稽古のこと。一方「リハーサル」は、練習全般を指す一般的なことばである。

- 4) 中高生による美術作品は、最終的な公演にそのままの形で表現されなかったことから、公演当日を含む 9 月 23 日から 10 月 2 日まで小ホールホワイエにおいて「未来の動物園」と題して展示された。このことは、地元の青少年の参加を重要な要素と位置づけるこの企画の狙いを如実に物語っている。中高生の作品を直接観客に見ていただける機会になっただけでなく、最終的にできあがった映像における表現の飛躍が理解しやすい企画であった。
- 5) 平成 29 年度文化庁委託事業「東海北陸地区 アートマネジメント研修会」2017 年 10 月 20 日開催
会場：福井県立音楽堂小ホール、研修会 III「他分野協働、プロアマ協働の可能性と課題」
プレゼンター：橋本恭一（福井県立音楽堂）、星谷丈生（作曲家）、川島洋一（福井工業大学教授）
アドバイザー：田村孝子（全国公立文化施設協会 副会長）
上記において本作品の一部の曲を再現する形で発表し、参加した公共ホール関係者から大きな反響を得た。
- 6) この気づきについては、下記の出版物中でも言及した。
公益財団法人 福井県文化振興事業団 編・発行「季刊ブンカ」Vol. 67、「デザインの果たす役割を地域に、そして社会に・・・」（川島洋一インタビュー記事）、2017 年 12 月、pp. 3-4.

付記 作品クレジット

主催：公益財団法人 福井県文化振興事業団

共催：福井県・福井県教育委員会

協力：福井工業大学環境情報学部デザイン学科 （※公式クレジットでは長すぎるため学部名を省略）

作品展示協力：福井県立美術館

後援：福井新聞社・FBC 福井放送・福井テレビ・FM 福井

プロデュース：橋本恭一

作曲：笠松泰洋・星谷丈生・旭井翔一・山下真実

脚本：宮下奈都

朗読：澤田孝司

演奏：越のルビーアーティストほか計 10 名

指揮：平塚太一

映像ディレクション（制作指導）：黒田和彦・松原かおり・川島洋一

映像制作：福井工業大学環境情報学部デザイン学科 学部生 9 名・大学院生 2 名

美術作品制作：福井県内中学校・高校 計 16 校

（平成 30 年 3 月 31 日受理）